

猶ほ甚だ狭し。是れ我が進歩の後れたる第二の原因なり。而して機械の應用彼に比して甚だ狭き所以のものは他なし其の所謂機械なるものは皆な西洋の機械にして、即ち西洋人が西洋人自身の爲に發明せしものに止り、日本人自ら日本人の爲に發明せしものに非ざればなり。蓋し彼と我とは大に其の風俗を異にするが故に、彼等の盛に利用しつゝある機械にして之を我國に應用し難きもの甚だ多く、従つて我國に輸入され模倣さるゝに至りたるは實に其の半ばに過ぎず。例へば電話機電信機の如きは日本語を用ふるも差支なく、汽車汽船の如きも又た日本服を纏ひ下駄を履きて乗るに差支なきが故に、是等のものこそ夙に我國に輸入されて大に文明の進歩を促したれども、之と異り吾等日用の生活品たる

米、味噌、醤油、酒、墨、下駄等に至つては、毫も西洋日進の機械を應用する能はず、従つて皆な道具時代の生産法に依りつゝある也。今更米國の例を見るに、一人の職工能く日に三百對の靴を造れり。即ち日に十時間の労働として、一時間毎に三十對宛を造り出すの割合なり。然るに日本に於いては、市に行いて下駄を買はんに、緒を附くるのみにても殆ど二三十分を要すべし。こは只だ一例なれど、其の外の事總じて皆な此の流儀にて、彼に在つては日用の百貨凡て機械の生産に仰げるに、我に在つては殆ど其の過半が依然たる道具時代の生産法に依れり。故に質は粗にして價は却て高からんとす。夫れ是等日用の貨物は吾等が生活費の大部を占むるものに非らずや、然るに其の生産の狀態今に至つて猶ほ此の如き

は、豈に我が經濟界の一大憂患に非らずや。汽車、電車、電話の類は、近頃に至つて全國到る所に開通し、至極便利と爲りたる様なれど、吾等の所得は毫も殖へずして、日用百貨の價のみ日に騰貴せば何かあらん。今ま英米人と吾等とを比較するに、彼の所得は我に十倍し、而して物價は則ち往々彼に安くして我に高からんとす。而して此の如きは皆な我が日用の百貨が機械的生産の大利を利用せざるが爲めのみ。思ふに此の勢にして進まんか、武力の戦争に於いてこそ幸にして彼等の發明したる大砲と軍艦とを利用し得たるが故に、敢て遜色を呈するに至らずと雖も、富力の戦争に於いては、誠、弓を以て大砲に向ふものと云ふべく、戦はずして勝敗の決既に明かなり。是れ豈に最も憂ふべきの問題に非らずや。

此の日亦た朝來坐して筆を執る。期日愈々今夜を以て盡くるが故に、臥いて筆を呵して茲に來れりと雖も、神既に倦みて全く文を成さず。乃ち更に一日を割愛して稿了を明日に期すと云ふ。夜九時記す。

(四〇) 大に日本特種の機械の應用及製造を盛にすべし

二十六日、曇。寒稍々甚し。火を擁して筆を執る。

諸君、吾等は日清戦争當時の分捕品を見て其の道具の幼稚なるを笑ひたるに非らずや。然るに諸君、吾等は今ま當時の清國よりも猶ほ遙に幼稚なる武器を以て經濟戦を爲しつゝあるもの也。夫れ吾國の軍人は夙に洋館を建て、寢臺に寝ね、和服を棄て、洋服

其のまゝ模倣するの外は何事をも仕出かし得ざる小頭腦の「アヲヤ人」と云へり。然らば清酒を棄て、麥酒を用ひ、下駄を棄て、靴を用ふるも亦た可なり。而かも麥酒を用ひ、下駄を用ひんとせば、必ず當に西洋新式の機械を用ひて之が生産に従事すべし。然らずんば、吾等日用百貨の供給、遂には凡て之を西洋に仰ぐに至らん。否、管に西洋新式の機械を用ふるのみならず、其の機械自身を吾が國民自らが生産せざるべからず。吾人は前既に機械の利用の爲め大に労働者の需要を減ずることを述べたり。げに機械の動力一馬力は労働者の二十一一人分に匹敵するものなり。故に帝都の中心に於いてさへ、電車線路の工事を爲すに、男女の労働者木遣歌を歌ひながら悠々として地盤を爲し居る今日の有様ならば兎

も角一旦斯かる稚態を棄て、凡て西洋新式の機械を採用せんに、は労働者の需要頗に減じて無数の先業者をも出すに至るべし。故に所詮今後の文明國は、機械そのもの、生産に人力を向くるの策に出でざるべからず。即ち管に機械の應用能力を具ふるのみならず、其の製造能力を具ふることが、今後の經濟界に於ける最も有力なる武器たり。要するに、吾人は今後大に機械の應用を擴張せざるべからざると同時に、又大に機械そのもの、製造能力を養成せざるべからざる也。(戸田博士著「日本の經濟」参照)。

(四一) 最も憂ふべきは米作の稚態なり

要するに今日の日本が貧國たる所以は、未だ充分に道具時代の稚

態を脱せざるが爲め也。殊に吾等生活費の大部を占むる日用の百貨が、凡て舊時代の生産法に依るが爲め也。試に英、普、米の三ヶ國に於ける労働者の生活費内譯を見るに左の如し。(イリイ著『經濟原論』より引用)。

	英國	普國	米國	平均
食料	五二、三六	五五、〇〇	四二、三八	四九、二五
被服	一八、一二	一八、〇〇	二二、〇〇	一八、二八
屋賃	一三、四八	二二、〇〇	一七、四二	一五、六六
薪炭	三、五〇	五、〇〇	五、六三	四、六一
其他	一三、五四	一〇、〇〇	一四、五七	一〇、七三
合計	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇

右の表に依りて見る時は、労働者の生活費中八割八分は衣食住薪炭の四者の爲めに費されつゝあるを見るべし。今更此の労働者

なるものは、國民の大多數を占むるものなり。然るに其の生活費の大部を占むる是等凡ての日用品が、吾が日本に於いては依然として昔な道具時代の舊生産法に依りつゝあるものとせば、日本の依然として貧國たるも敢て怪むに足らざるべし。

乍併吾が日本國民は決して現狀に満足するものに非らず。改良すべきものは着々として改良し、模倣すべきものは亦た着々として之を模倣す。故に吾人は決して日本國の將來を悲觀するものに非らずと雖も、只だ一事の聊か掛念に耐へざるは吾が米作の將來なり。

蓋し日用品中の日用品は食料にして、前の表にも示したるが如く、労働者の生活費中其の殆ど五割を占むるは即ち食料なり。而し

て其の食料の中吾國に在ては米穀固より其の主都を占む。然るに其の米穀の生産法たる舊時代の稚態を改めざるも亦甚し。吾等京都に住るしより、讀書に倦かば則ち近郊を散歩す。吉田山以北、真如堂以東、皆な一面の田畑にして、農夫あり三々五々皆な勞作に勤めつゝあるを見る。然るに其の用ふる所の道具を見るに、稚態も亦た甚し。吾等外國の經濟史を繕きて、屢々五世紀十世紀前の農夫の様を描きしを見る。今ま我が農夫の様を見るに、誠に古代經濟史中の景なり、豈に驚かざるを得んや。前にも述べたるが如く、米國メソコ地方に在りては一人の農夫能く年に千百石の小麥を生産す。然るに我に在つては、六千萬の人口を養ふに殆ど三千萬の農夫を必要とするの現状なり。故に彼に在つては麥價

日を追ふて安しと雖も、我に在つては米價却て年毎に高し。例へば之を獨乙ハンブルグ取引所の取引價格に就き麥價(小麥、ライ麥、大麥、燕麥)の變遷を徴するに、千八百七十一年より同八十年に至る十年間の平均價格を百とせば、千九百八年に於ける價格は七二・六にして即ち殆ど三割の下落なり。又之を英國に於ける一般食料品の價格の變遷に徴するに、千八百六十七年より同七十七年に至る間の平均相場を百位に立つれば、千九百九年に於ける價格は七十三に過ぎずして、是れ亦た殆ど三割の下落なり。『京都法學會雜誌』五卷八號所載、河田學士の論文に據る。然るに吾が日本に於いては、明治元年に米價一石四圓七十二錢なりしもの、明治三十九年には十四圓四十四錢となり、正に三倍に騰貴せるを見る。『日本經

濟新誌」三卷五號所載、横井博士の論文に據る。故に彼と我とを比較すれば、彼の所得は我に十倍せるに、食料の價格に至つては却て我れ彼よりも高からんとするの傾向あり（西洋に在つては麥一石約十圓なり）。是れ豈に最も憂ふべき問題に非らずや。

(四二) 日本人は永久に米食人種

たるべし

敢て問ふ、之が救済の策如何。
思ふに吾人は既に日本刀を棄て、銃劔を採り、袴を棄て、燕尾服を採れり。然らば又た日本米を棄て、麵包を食ふべき乎。曰く、吾人にして能く爲し得と云ふならば又た之に如くものなし。乍

併、吾人は日本人なり、數千年來米穀に依つて養成されたる祖先の胃腸を遺傳するものなり。故に、縱ひ日本刀を棄て、銃劔を採るは甚だ容易なりしとするも、否な漢字を棄て、羅馬字を採るを以て猶ほ可能なりとするも、吾人は容易に日本米を棄て、麵包を取ること能はざるべし。勿論一部の人士には今日既に米食を廢して麵包を取りつゝあるものもあらん、乍併、吾が日本國民全體が其の食物の主部たる米穀を廢するに至るが如きは、之れを十年百年の間に期待すること能はざるべし。然らば縱ひ近き將來に於いて、吾が國民の凡てが洋服を着、洋館に住る、椅子に倚り、テーブルに向ひ、ナイフを用ひ、フォークを用ふることあるも、其の食ふ所のものには恐らく依然として米を絶たざるべし。

(四三) 内地農業の安全なる所以

是れ即ち憂ふべきこと也

是に於て乎、日本農業の基礎は頗る安固なりと云ふべし。吾人は先きに英國農業の頽廢の事實を舉げて、現代經濟界の動搖の頗る恐るべきを説きたり。乍併、日本人の嗜好する所の日本米、日本農業の生産する所の日本米は、彼の小麦の如く廣く世界に生産せらるゝ所なきが故に、たとひ交通機關の進歩の爲め千里を縮めて一里を爲すとも、日本の農家は姑く枕を高くして惰眠を怠るを得べし。此の點に於いて日本の農家は能く現代世界の大勢の外に超然たることを得。只だ超然たることを得ざるは、吾等日本國民の

全般なり。如上の事實、單に之を農業の見地より云はば、則ち祝すべしと雖も、廣く之を國民の見地より云はば、是れ誠に憂ふべきの問題なり。

(四四) 食料を世界に求むべし

夫れ動物の繁殖は食料の供給増加を前提とす。今ま吾等日本人は、西洋各國の國民と異り、米穀を以て食料と爲すものなり。然るに其の米穀なるものは、此の島帝國の五割以内の地積に於いて、極めて幼稚なる道具時代の農法に依つて生産せらるゝのみ。固より其の生産は將來益々増加せん、而かも其の價格の次第に騰貴するを奈何せん。即ち吾等日本人は、軍事に於いてこそ夙に世界列

強の仲間入りをして爲したれ、食事に於いては、従つて又た經濟の主たる部分に於いては、未だ以て世界列強の仲間入りを爲すに至らざるもの也。

乍併、吾人は吾が日本人が能く自己の運命を開拓するの力量を有するを確信するもの也。故に又た吾人は、かの米作が吾が日本人の手に依つて大に發展するの目あるを確信するもの也。夫れ英國にして盛なれば、英語は世界に通用し、獨乙にして盛なれば、獨語も亦た世界に流布するが如く、今は歐米人全盛の時代なるが故に、世界到る所の地積開拓せられて皆な彼等の食料生産地と爲る。然らば若し將來吾が日本人にして大に雄飛することあらんか、日本語は則ち世界に通用し、而して又た到る所に米作地起らん……

吾人は固より先づ内地に於いて、其の米作の經營を根本的に改善すると同時に、盛に耕地の擴張を講せざるべからず。乍併、米穀を産するの地何ぞ必ずしも日本内地に限らん。乃ち嘗て歐洲人が世界に雄飛して其の食料の生産地を求めたるが如く、吾等も亦た盛に天下を跋躡し好地を選んで吾等が食料を生産するの途を講ずべきなり。吾人は此の如く信ず。即ち嘗て鎖國的農業論者たりし著者は、かくて帝國主義的農業論者と爲りたるもの也。

(四五) 日本國の將來

之を要するに、吾等日本人は既往四十餘年間世界に類例なき速度を以て進歩したれども、しかも其の程度に於いては、之を歐米諸國

に比するに、後ること實に五十年乃至百年なり。故に吾人は、今後更に倍奮の努力と倍奮の速度を以て、一切方面の進歩發展を講せざるべからず。而かも倍奮の努力と速度を以て進歩發展を講ずるに至らんか、則ち又た倍奮の變動あり倍奮の懸隔を生ずるを覺悟せざるべからず。思ふに物質界に於ける變動は、今後更に驚くべきものあるべく、其の懸隔又た恐るべきものあるに至らん。而かも其の思想界に於ける變動と懸隔とに至つては、更に驚くべく、更に恐るべきものあらん。

ル、ボン論じて曰く「社會主義の心理」英譯三七〇頁

「余は日本が遠からずして衰亡するを信ず、其の故他なし、日本は其の過去の文明と全く共通の點なき西洋の文明を輸入したれば、

とも彼は到底之を調和するの能力なく、現に之が爲め極端なる無秩序の状態に陥りつゝあれば也。」

彼の歐人が此の同化力あり統一力ある我が日本民族の心理を解し得ざるは當然にして、彼等が好んで此の如き言を爲すも敢て怪むに足らずと雖も、而かも他山の石、以て我が玉を磨くに足るべし。夫れ國情は將に一變せんとなす。是の時諸君に於いて何の覺悟ありや。敢て問ふ、敢て問ふ。

明治四十三年十二月二十六日、午後二時、豫期に後るゝこと半日、豫定の論題を述すること十の三四にして、筆を吉田山の東麓に擱く。怪むべし、正に筆を擱く刹那、一天搖き曇りて轟然たる聲遠くより來る。窓を披けば風雨俄に來り、枯葉飛んで天を蔽ふ。

筆を置くの後、更に全稿を執つて之を通讀するに、意に滿たざる所甚だ
多し。乃ち若干朱を加へて補正し來れば、夜既に十二時を過ぎたり。
思ふに落葉拂へども盡くるの期なかるべく、余亦た長く此の事に従ひ
難し。乃ち意を決して之を鉛版に刻せんとすと云爾。(○時中、追記)。

明治四十四年二月二十六日、植字校正を終るの夜、更に追記して
く生物の榮枯盛衰を觀るに、強大なる武器を有する者は能く榮
を得。虎獅子の類の爪牙に於ける、人類の道具、機械に於ける、即
也。然るに此の如き有力なる道具、機械なくして能く榮ゆる者は
團結力に富むの生物なり。かの蟻の如き極微の虫類が能く人類に
ぐの文明を發揮しつゝあるは、全く是が爲めのみ。而して日本人の長
所は則ち前者にあらずして後者に在り。本書元と之を上下の兩卷に
分ち、下卷に於ては此の團結力のことを略論せんと期せしも、遂に全く
之に及ばずして已めり。他日閑を得ば、記して之を增補せんと欲す。



明治四十四年三月廿五日印刷
明治四十四年三月廿八日發行

時勢之變 奥付

(定價五拾八錢)

著者 河上肇
京都市上京區吉田町字東近衛十四番地

發行者 池田常太郎
東京市京橋區銀座一丁目一番地

印刷者 河野二郎
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷株式會社

不許
複製

發行所

東京市京橋區銀座
一丁目一番地

讀賣新聞社

振替口座六一二番

◎ 紙聞新き白面も最てしに益有も最 ◎

讀賣新聞

報道迅速
趣味津々

定價
一ヶ月 參拾五錢 郵稅一ヶ月拾五錢
三ヶ月 金壹圓 郵稅共壹圓四拾五錢
六ヶ月 貳圓 郵稅共貳圓四拾五錢
一ヶ年 分五圓 郵稅共六拾錢

議論穩健、記事高尚、材料豊富、趣味横溢、凡に文學新聞として重んぜられ、亦社交新聞として著はる。其の紳士學者間に愛讀せらるゝは、紙上常に學術上の報道を絶たざるが爲め、田夫野人に愛誦せらるゝは、嗜好せらるゝは、田園の趣味を缺かざるが爲め、商人會社に嗜好せらるゝは、牙籌の傍に樂天の在るを示して、經濟財政の外別は慰安の文字多きが爲め、婦人女子に歡迎せらるゝは、家庭の友として益すべき實利的記事多く、又家族團

明治七年創刊 ● 年中無休刊

樂の中に娛樂的話柄を供するものなど世に此の新聞の如くなるもの無きが爲めなり。故に一度此新聞を手にしたる者は永久之に離るゝこと能はず。第一號發行以來今日迄三十餘年連続して之を愛讀せる者現に八百六十二人に達し二十年間の連續者の如き無慮二萬に過ぎ、十年間連續の如きは擧げて數ふべからず、讀者との關係全然親戚の如き感あるは畢竟之れが爲めなり。我社は望む、此親戚の向後益々増加して、紙上の實際の彌々密なるに至らん事を

優待
小學校教員町村役場吏員郵便局員に限り郵稅は當社にて負擔す。即ち一ヶ月前金壹拾五錢〇三ヶ月前金壹圓五錢

發行所 東京市橋區一丁目番地 日就社 振替口座 東京一六番

讀賣新聞 日就社 出版圖書目錄

家庭之部

池田秋曼 著	樋口二葉 著	新讀社 選	澤田順次郎 著	靜岡 著	陸軍一等主計 著	松岡氏 著	讀賣新聞 編	冷泉氏 著	新讀社 編
新 家 庭	家 庭 新 話	女 子 處 世 百 訓	最 新 女 子 教 育 論	女 子 遊 戲 環 法	和 洋 宴 會 及 其 的 禁 物	學 事 便 覽	新 女 子 書 簡 文		
(十一版)	(三版)	(初版)	(初版)	(初版)	(五版)	(初版)	(初版)		
家庭の新趣味を解し面白く暮さんと欲する者は讀め	坊つちやん嬢さん讀で御覽なさい面白いと請合	當代諸名家の談話話悉金玉の文字現代の女大學	最も大膽に直載に生殖本能主義色情問題等を論ず	女子の遊戯に最適當する遊戯法にて使用法亦簡便也	和洋宴會の心得方を悉く解り易く親切に説明せり	教育に従事せる教師及學生に勿論各家庭に必要書	舊式御定文句を去りて明治式に編纂せし者好模範		
郵稅 六拾五錢	郵稅 二拾貳錢	郵稅 六拾錢	郵稅 四拾五錢	郵稅 貳拾貳錢	郵稅 貳拾五錢	郵稅 三拾五錢	郵稅 六拾五錢		

田村化三郎 著

男女相之警戒

(初版)

男女相合の秘訣にして夫婦喧嘩の豫防法必要一讀 定價 貳拾錢

伊藤氏 著

馬鈴薯調理法

(初版)

馬鈴薯を食するに依る理の宜きを得ざるに依る 定價 參拾五錢

陸軍一等主計官内藤氏 著

食養大全

(再版)

生理を説き衛生を説きたる有益の實地料理法なり 定價 拾貳圓

修養之部

中江藤樹 著

孝經小解

(新版)

熊澤氏の孝を説くは天地の大を説く也修養の聖典 定價 三十八錢

池田秋安 著

天才の發揮

(四版)

青年立志の要訣及其成功の神秘取めて此書にあり 定價 二十五錢

讀賣新聞編輯局 編

名士の中學時代

(七版)

青年の情眼を醫醒するは名士の經歷を讀むに在り 定價 二十五錢

讀賣新聞編輯局 編

名媛の學生時代

(再版)

世の模範たるべき名媛世の學生時代を叙せる者 定價 四拾錢

衛生之部

醫學士田村化三郎氏 著

神經の衛生

(九版)

怒る人驚く人又は記憶力に乏き者の必讀すべき書 定價 四拾錢

醫學士田村化三郎氏 著

肺の衛生

(四版)

此書を讀めば肺病に罹る憂なく病者亦全快すべし 定價 四拾五錢

醫學士田村化三郎氏 著

肥える法瘦せる法

(四版)

肥えたり者若くは本書を讀め瘦せたり者若くは本書を讀め 定價 四拾五錢

醫學士田村化三郎氏 著

子の有る法無い法

(四版)

子を得んと欲する者子の不用なる者は本書を讀め 定價 四拾八錢

醫學士田村化三郎氏 著

胃腸の衛生

(三版)

之を讀めば疾の原因と養生法を知り大なる幸福を得 定價 參拾五錢

讀賣新聞編輯局 編

素人療治法

(新版)

誰にも出来て簡便で安全な家庭向の簡易新療治法 定價 四拾錢

醫學士田村化三郎氏 著

善く眠る法覺る法

(再版)

善く眠り善く覺るの方法本書に於て眞に自由自在 定價 貳拾六錢

讀賣新聞編輯局 編

病人の慰藉

(新版)

病者を慰め速に輕快を覺えんとする者は一讀せよ 定價 四拾八錢

文藝之部

安藤幻怪 著

川柳歳事記

(初版)

著者拾數年の苦心川柳歳事記の嚆矢なり必要一讀 定價 四拾錢

農學博士横井時敬氏 著

小模範町村

(四版)

興味湧くが如き中に町村改良策を説く新社會小説 定價 五拾五錢

町田藍川 著

風雲兒女

(初版)

論文あり小説あり藍川氏縦横の才筆を見るに足る 定價 貳拾五錢

上司小創 著

其の目く

(五版)

娛樂にも作文の手本にもなり又教訓にもなる本也 定價 四拾八錢

法學士江木
眞氏著

膠州灣論

(再版)

膠州灣は獨逸東洋政策の
發源地大に研究すべき者

定價 八拾錢

讀賣新聞
編輯

增補東京案内

(再版)

何人にも重寶な東京の案
内寫眞版滿載市街地圖入

特價 郵稅共
參拾五錢

島崎雪村
著

蒙古行

(初版)

女史の壯途優柔なる婦人
界を驚せし雄麗の快文字

定價 貳拾參錢

新聞雜誌
切抜保存用

スクラップブック

(六版)

其製本最も堅牢にして四
六二倍判紙數二百頁あり

定價 八拾錢

讀賣新聞社
出版部編

新式原稿用紙

(五版)

十行三十字詰振假名欄附
青色刷にて吸取紙表紙附

定價 四十錢

東京市京橋區銀座

發行所

讀賣新聞社出版部

振替貯金口座六一二番

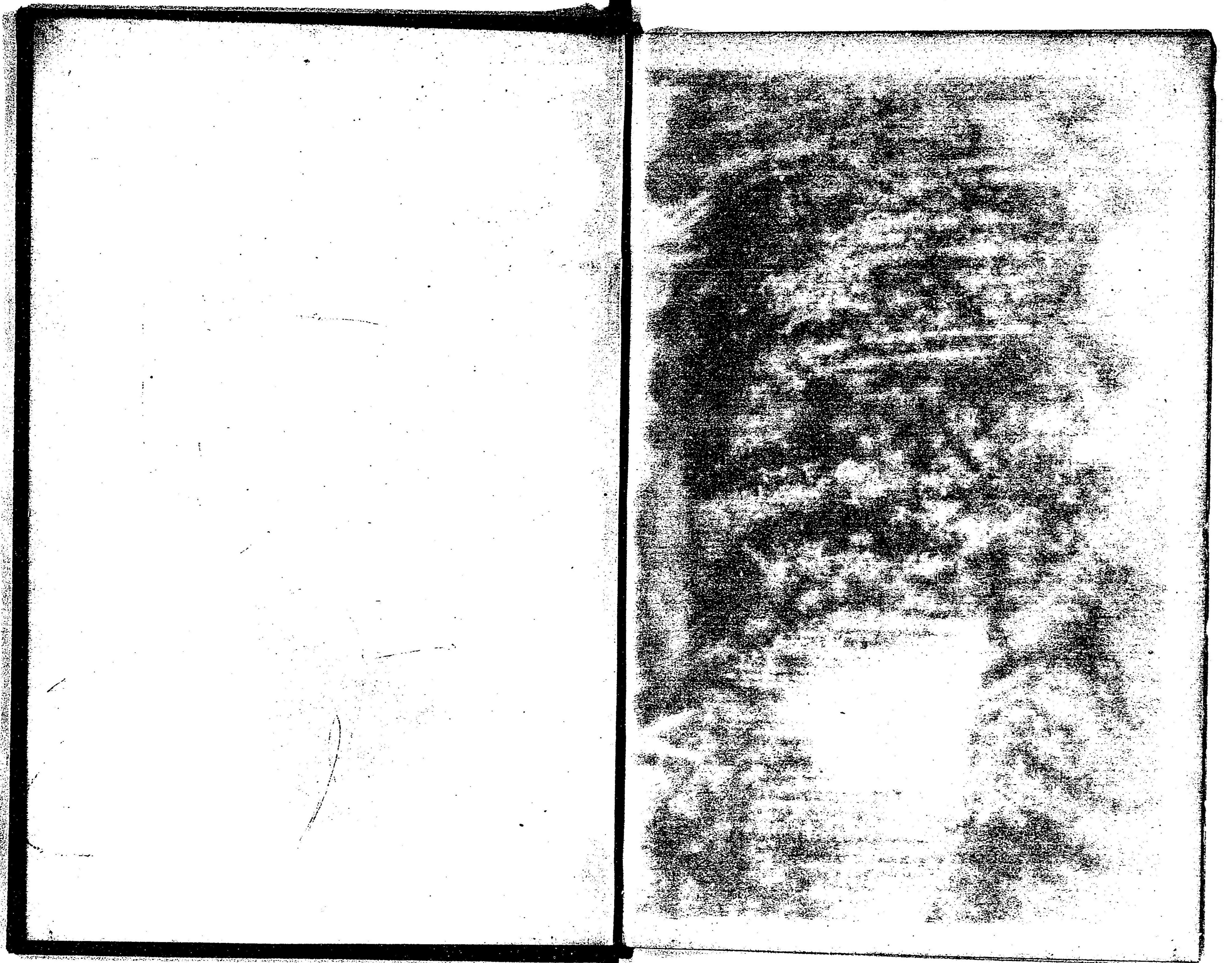
大賣所

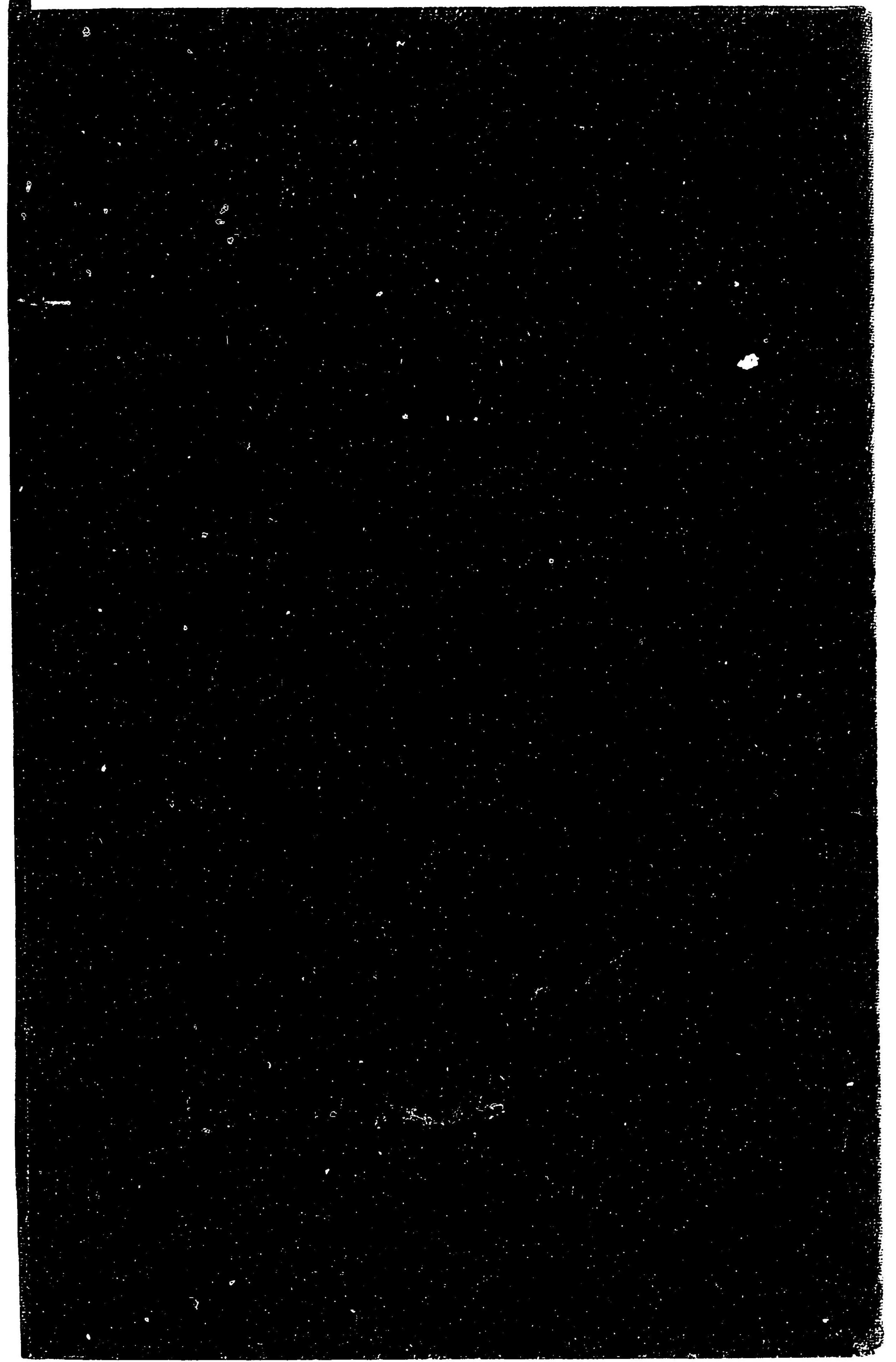
東京市神田區表神保町
 東京市京橋區尾張町
 東京市京橋區元數寄屋町
 東京市神田區裏神保町
 東京市京橋區西紺屋町
 東京市日本橋區本石町
 京都市佛光寺通り烏丸東入

東京堂書店
 北海堂書店
 上田屋書店
 良明堂書店
 至誠堂書店
 東枝律書房

大阪市東區北渡邊町
 名古屋市中本町三丁目
 久留米市米屋町
 高松市丸龜町四丁目
 山口縣山口町字大市
 福井縣大飯郡高濱町
 岡山縣吉備郡高松村

杉本堂書店
 川瀨金華堂
 宮脇金文堂
 白銀日新堂
 常藤堂
 榎並書店





039530-000-7

特70-315

時勢之變

河上 肇/著

M44.3

BDA-0086



